

飛尾横穴群 2

これは、擁壁を設置する工事中に発見された横穴墓の発掘調査報告書である。

調査の経緯

平成22年11月5日に工事施工者の株式会社杉本建設（熊本市城南町）より横穴発見の一報が熊本県教育庁文化課に入った。文化課では現地確認のため、中村主任学芸員を派遣すると共に、工事発注者の熊本県宇城地域振興局土木部工務課と今後の取り扱いについて、協議を進めた。その結果、発見されたのは古墳時代の横穴墓1基であることを確認した。同時に、工事予定地には未発見の横穴が存在する可能性が高いことから、工事範囲について確認調査を実施することとした。11月16日に西住主幹・福田学芸員による確認調査の結果、新たに3基の横穴墓の存在が判明。これらは、既に知られている飛尾横穴群と一連のものと認定できた。

県砂防課及び宇城地域振興局土木部工務課との協議のなかで、この4基については発掘調査を実施する方針となった。文化課では、文化財保護法に基づく調査実施の手続きを行うと共に、調査体制を整え、平成23年1月6日から14日まで現地調査を行い、その後、調査報告のための作業を行った。

なお、当該地は急傾斜地崩壊対策事業に先立ち、平成19年度に熊本県文化課が発掘調査した『飛尾横穴群』（熊本県文化財調査報告第246集）として刊行の近接地であり、本報告においてはこの資料を準用している。

調査の方法

見つかった4基のうち、確認調査で発見された3基については、擁壁施工範囲内（幅2.5m×深さ1.5m）での調査をおこなった。なお、既に21基の存在が確認されている飛尾横穴群の続き番号を採用して、22号～25号墓と呼称した。



図1 熊本県地図



図2 調査地位置図



発見されたときのようす
天井部が陥没して発見された横穴墓



天井部からみた22号墓の状況
奥屍床が明瞭



確認調査(擁壁設置範囲)
新たに3基の横穴が発見された



調査のようす
排水しながらの掘削と実測作業



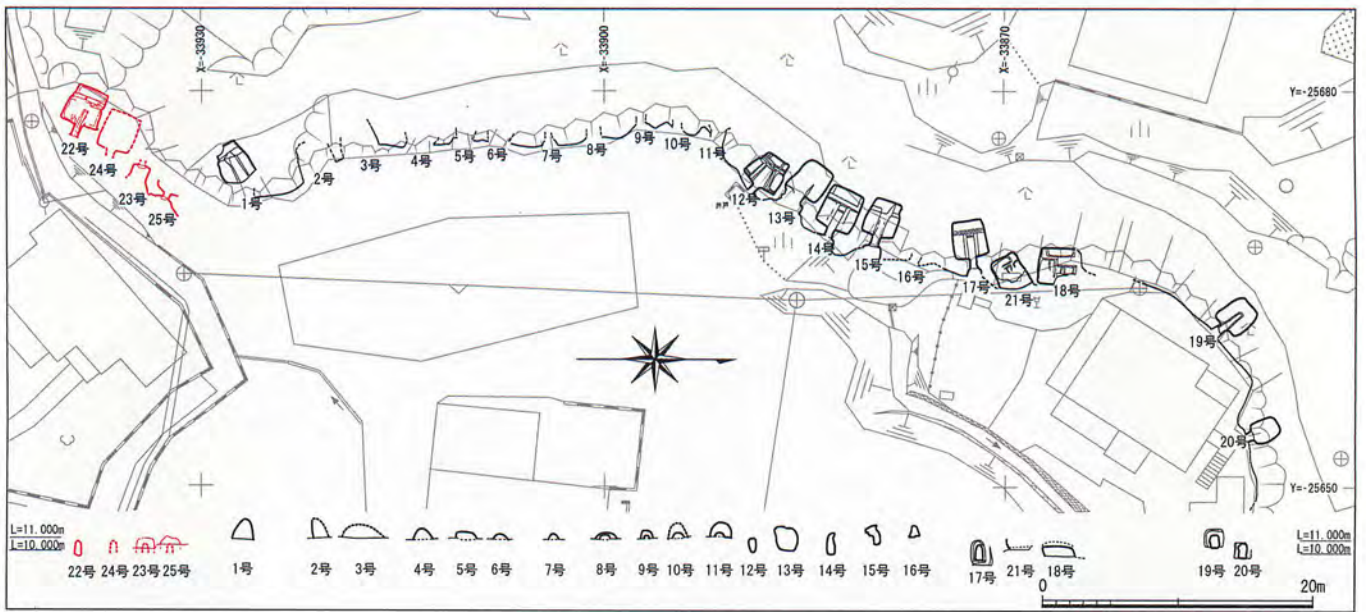


図3 飛尾横穴群位置図

発見された4基は、飛尾横穴群の南端の南斜面に位置し、南東に開口する。既に知られている横穴墓より、標高で 50 cm～1m程度下位に存在する。発見時は道として切り開いてあったが、以前は傾斜地の山林であったという。土層は凝灰岩の風化土が最上面に、直下に凝灰岩が堆積する。その凝灰岩をくりぬいて造られる。

- 22号墓 最南西端に位置する。通路下部で標高約 9.7 m。工事中に天井部が陥没して発見された。落ち込んだ土を重機によすくい上げたため、玄室の一部は破壊。また、奥屍床で鉄刀が発見された。屍床の仕切り壁は、奥壁と左壁の一部が残存していた。閉塞石も残存。玄室の規模は 2.8 m×2.8 m の方形で、壁の立ち上がりから推測すると、天井部はドーム型である。
- 23号墓 羨門・閉塞石が残存。閉塞石は工具痕が残る上端部から下位を確認。その規模は幅 60 cm×高さ 40 cm 以上であり、20 cm 以上の厚さを確認した。下部を手前に、上端を奥に斜めに立てかけた状態である。石材は凝灰岩で硬質。前庭部は 25 号墓と共有している可能性が高く、閉塞石の位置から、他の横穴墓より、玄室の位置はより奥に存在することが分かる。
- 24号墓 玄室の 1/3 程度を確認した。後世の客土で全て埋め尽くされており、その中から 6 世紀後半のものであろう須恵器（提瓶）が出土した。残存している玄室の方向性からも、隣接する 22 号墓と同規模と推定される。他の横穴墓の状況から、未調査区内に閉塞石が残存している可能性が高い。
- 25号墓 羨門・前庭部・閉塞石・玄室の一部を確認。上部は削平。前庭部は 23 号墓と共有する可能性が高い。閉塞石は幅 40 cm×厚さ 20 cm。23 号墓の閉塞石と比較すると軟質である。



第4図
22～25号墓実測図

22号墓

玄室と通路の調査ができたので、詳細を報告する。

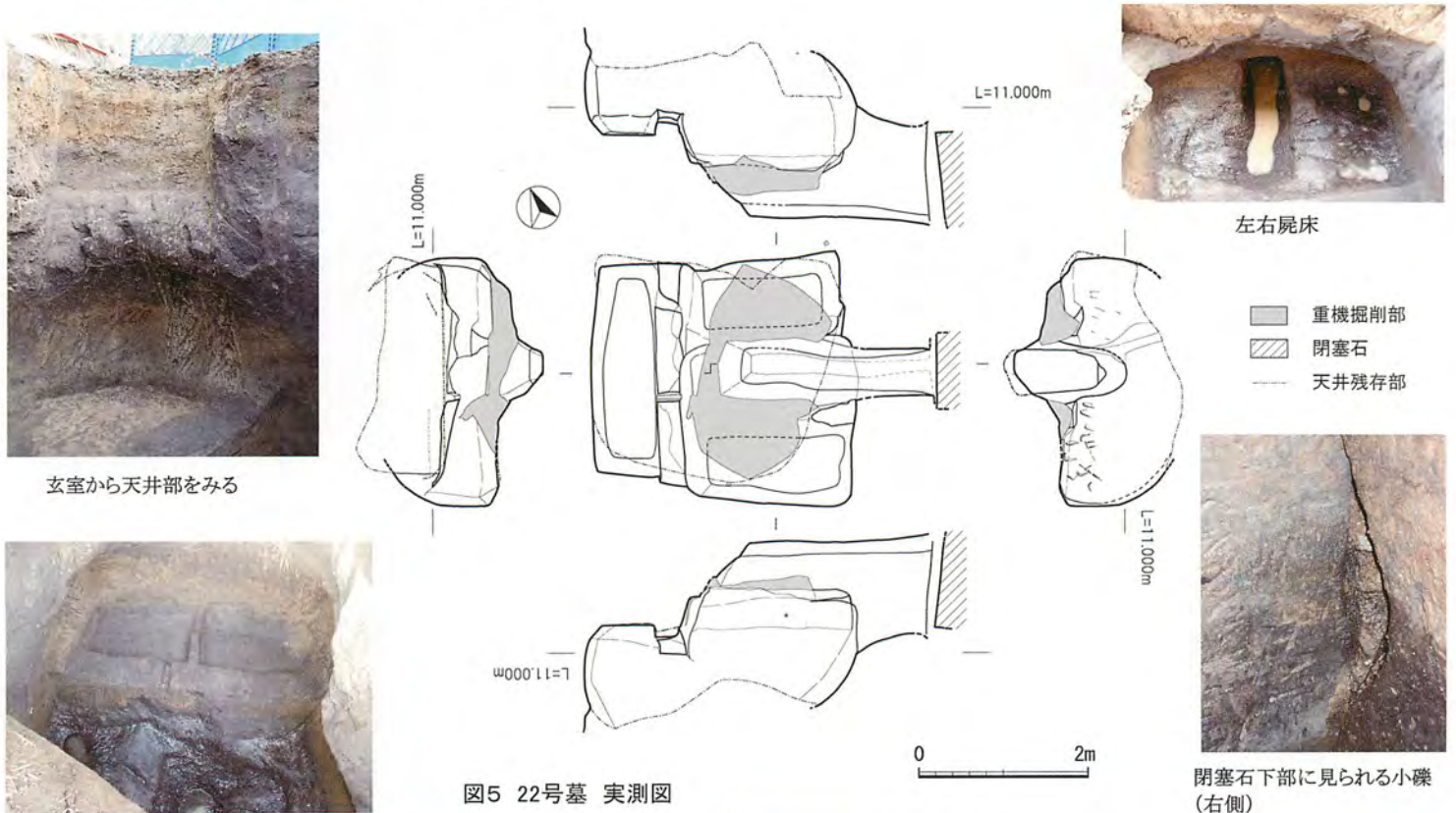
奥屍床及び左屍床は、堆積土が残存しており掘削をおこなった。奥屍床では屍床の長軸に直交する土壌観察ベルトを設定し、堆積状況を確認した。上部に粘質土、下部に砂質凝灰岩という二層の堆積を確認した。両層ともに不明瞭ながら、骨片と思われる細片が混入していたが、特に下部層においては、中央南端に集中部が見られた。

覆土は、微細遺物を検出するため、一旦土嚢袋に集めることとして、観察ベルトに直交する区画を設定して、左奥をA、右奥をB、左手前をC、右手前をDと四分割した。後日、水洗作業を行ったが、小玉の一点すら確認できなかった。

なお、奥屍床は左右の屍床より約 50 cm高く、仕切りの壁の厚さは約 20 cmでしっかりしている。中央左寄りに小規模な排水溝を持つ。幅 10 cm×深さ 8 cmで通路側へ傾斜する。確認できなかったが、中央右寄りにも同様の施設が存在していた可能性がある。排水路の覆土は茶褐色粘質土であり、この上部から小型の鉄刀が置かれるような状態で出土した。

左屍床は若干覆土が残存していたが、湧水もあり不明な点が多い。覆土の水洗をおこなったが、何も出土しなかった。

閉塞石は、内側から見る限り、幅 50 cm×高さ 90 cm以上である。左右にはこぶし大以下の小礫が存在しており、閉塞石前面は、閉塞石自体または羨道が小礫で覆われている可能性が高い。



玄室(前方より)

排水溝

奥屍床覆土

閉塞石(玄室から)

玄室からみる通路と閉塞石

奥屍床(掘削前)

右屍床(奥屍床から)

左屍床(奥屍床から)

出土遺物



提瓶(23号墓 客土)



鐵刀(22号墓 奥屍床)



鐵刀(22号墓 排水溝上部)



おわりに

今回の調査では、工期との調整や調査体制など、すべてに緊急対応をとる必要があり、調査作業も職員で実施した。破壊される部分の最小限の調査となったが、22号墓を始めとして、幾らかの貴重な情報を得ることができた。22号墓は『飛尾横穴群』で報告されている15号墓に類似し、玄室構造からは大規模の部類となり、第246集で報告されている第2類の範疇であろう。

今回の発見で飛尾横穴群は二段以上の形成である可能性が出てきた。さらに、未発見の横穴が存在している可能性が高い。

出土遺物は、須恵器の提瓶(口縁端部の直径10cm)1点、鉄刀2点であった。22号墓奥屍床出土の鉄刀は、欠損しているものの、残存長38cm以上ある。刃部幅は2.5~2.8cm。また、排水溝上部出土の鉄刀は、全長19cm以上、刃部幅2.0~3.0cmである。

発見の一報から、緊急調査の実施においては、県土木部砂防課及び宇城地域振興局土木部を始めとする、関係者の皆様のご協力のおかげです。ここに感謝を申し上げます。

調査者 熊本県教育委員会文化課 文化財調査第二係

【現地調査】西住欣一郎(主幹) 廣田静学(参事) 木村元浩(参事) 福田匡朗(学芸員) 多賀晴司(非常勤職員)

【報告書作成】佐藤淳子・江見恵留・加藤早織・今田里枝(非常勤職員)

松本裕子・宮崎典子・府内博子・手嶋裕子・大塚トシ子(臨時職員)

報告書抄録

| | |
|--------|-----------------------------|
| ふりがな | とびのおおうけつぐん 2 |
| 書名 | 飛尾横穴群 2 |
| 副書名 | 飛尾急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 熊本県文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第267集 |
| 編集者名 | 木村 元浩 |
| 編集機関 | 熊本県教育委員会 |
| 所在地 | 〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号 |
| 発行年月日 | 2011年(平成23年)3月31日 |

例言・凡例

- 1 座標は世界測地系(日本測地形2000)使用。方位は座標軸を基にした座標北を使用。
- 2 出土遺物は熊本県文化財資料室(熊本市城南町沈目1669)に保管。

| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査 期間 | 調査 面積 | 調査原因 |
|---------------------|--|-------|------|-----|------|----------|----------|----------------------|
| | | 市町村名 | 遺跡番号 | | | | | |
| とびのおおうけつぐん 飛尾横穴群 | くまもとけんまるとし 熊本県熊本市 じょうなんまち 城南町 ひがしあたか 東阿高 あざとびのお 子飛尾 | 43341 | 115 | 32° | 130° | 20110106 | 22㎡ | 飛尾急傾斜 地崩壊対策 事業 |
| | | | | 41′ | 43′ | ~ | | |
| | | | | 39″ | 34″ | 20110114 | | |

| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|----|--------|-------|--------|------|
| 飛尾横穴群 | | 古墳時代後期 | 横穴墓4基 | 須恵器 鉄刀 | |

| | |
|----|---|
| 要約 | 工事中に発見された4基の横穴墓の緊急調査を実施した。3基には閉塞石の残存を確認した。大半は工事に直接影響を受けないので、擁壁設置後もその下部にそのまま保存されている。 |
|----|---|